

戦後以降の日本におけるコンペの展開に関する研究

-プロポーザル方式の功績と問題点を中心に-

Study on the development of competitions in Japan after the war

Focusing on the achievements and problems of the proposal method

○藤井一稀¹, 田所辰之助²*Kazuki Fujii¹, Shinnosuke Tadokoro²

Competitions have functioned as a means of discovering and promoting excellent designs and new talents up to the present day. However, in some local governments, the idea of fair design competitions has become formalized and public. There are cases in which the method for selecting architectural designers is distorted. As part of this, I would like to focus on the selection method called proposals.

The purpose of this research is to clarify the significance and influence of competitions on society and the architectural world from the generation and spread of proposals.

1. はじめに

建築設計競技,いわゆるコンペは,現代に至るまで,優れたデザインや新たな才能を発掘・登用する手段として機能してきた。しかし,一部の地方自治体においては,公正であるべき設計競技の理念が形式化され,公共建築の設計者選定方式が歪められている事例が認められる。その一端としてプロポーザルと呼ばれる選定方式に着目したい。

本研究ではプロポーザルの発生とその広がりから,社会や建築界に対するコンペの意義と影響を明らかにすることを目的としている。

2. 研究方法

戦後からプロポーザルが地方自治体にて普及する1990年代までを対象に雑誌,新聞などの関連資料から収集し,分析を加える。

3. 戦後コンペの始まり

戦後の本格的な公開コンペの先駆けとしては「広島平和カトリック聖堂」(1948年)のコンペが挙げられる。多くの若手建築らが参加し,十数回近くの論議と採決が繰り返された結果,一等当選該当者なしという形が取られた。これについて審査員を外れていた岸田日出刀は「一等は絶対的な価値認定ではなくて,相対的な比較判断でなければならぬ」とし,訴えたが聞き入れられなかった。その後,審査員の1人であった村野藤吾によって実施設計が進められることとなった。

次に「仙台市公会堂」(1949年)が行われた。竹基雄+大林新の案が当選したが応募者の1人である宮川省三から応募規定違反が投書により指摘された。これに対し審査員の岸田日出刀は規定違反を認めつつも,作品

の持つ可能性を評価した上で,あえて入選させたと弁明。この二つのコンペは応募者,運営共に不慣れさとコンペ重要性の認識不足を象徴した事件である。

4. 建築家の著作権

戦後初の国家的公共建築の本格的な公開コンペとして「国立国会図書館」(1953年)が挙げられる。

本コンペでは建築家の著作権について焦点が当たった。

1953年11月に発表された応募要項にて次の条項が含まれていたのである。

1) 入選設計およびその設計図書は,国立国会図書館の所属に帰す

2) 工事実施は原則として入選した設計図書によるが,入選図書であっても,その設計を変更し,または採用しないこともある。この場合異議申し立てはできない。

この条項に対し,早稲田大学助教授であった吉阪隆盛は質疑書を提出。

建築家の著作権用後の運動は加速し,『朝日』と『毎日』の両新聞も取り上げたことから社会全体がコンペへの関心の高さが窺える。吉阪の呼びかけにより建築家有志が中心となり,「建築家著作権準備委員会」が設置された。このような努力もあり,1957年に日本建築学会・日本建築家協会・日本建築士連合の三会による「建築設計競技規定」が制定された。

5. コンペ最盛期-1960年代

1960年代は「国立劇場」(1963年)「国立京都国際会館」(1963年)「最高裁判所庁舎」(1968年)と立て続けに国が主催するコンペが行われた。特に「国立京都国際会館」の公開コンペは公正なコンペ実績を築いた例

1: 日大理工・院(前)・建築 2: 日大理工・教員・建築

としてコンペ史の中でも高く評価される。作品もさることながら着目すべきはその運営形態であった。1つは明確に当選者に実施設計を担当させることを明記したこと。特筆すべき点は我が国で初めて審査経過を詳細にまとめた膨大な審査報告書が作成されたことである。これによりコンペの企画、審査員構成、運営、事後処理など、全ての面で公正に行われたという実績が築かれた。

Table 1. 1960～1970年におけるコンペに関わる論考

著者名	タイトル	出版年	ジャーナル/書籍名
橋本邦雄	建築設計競技のなりゆき	1960	建築年鑑 1960年版
藤田二郎	コンペ問題再検討の究極	1962	建築文化
宮内嘉久	コンペ問題再検討の究極	1962	建築文化
坂口隆一	日本の建築界の施設構造—あるコンペをめくって	1962	新建築
藤井正一郎	コンペ問題の核心	1962	新建築
佐々木宏	設計競技について論じよう	1962	近代建築
坂口隆一	公開競技を望む	1962	新建築
ミ下同人	日本のコンペの過去・現在・未来	1962	国際建築
坂口隆一	コンペ問題の核心は何か	1962	近代建築
橋本邦雄	近年の設計競技の問題について	1962	近代建築
佐々木宏	設計競技の今後の問題	1962	近代建築
藤田二郎	コンペの規定とその普及—誰が建築家なのか	1963	新建築
志賀信男	コンペに寄せて	1963	新建築
藤井正一郎	コンペの規定とその普及	1963	新建築
宮内嘉久	日本のコンペの過去・現在・未来	1963	建築文化
田中誠	今後のコンペに望むもの	1963	建築文化
村松貞由郎	これからのコンペに対する構想	1963	建築文化
前田隆二	設計競技の守と盾	1963	建築雑誌
沢谷正一	コンペに関するモトワ	1963	建築雑誌
川添登	コンペティションの理念	1963	建築雑誌
本城和彦	コンペの意義と問題点	1963	建築雑誌
吉原文彦・藤原浩	設計競技の実現と問題点	1963	建築雑誌
藤井正一郎	コンペ問題と建築家のアロワエーション	1963	建築年鑑 1963年版
安田臣	建築の設計競技のあり方	1964	
坂口隆一	公共建築のコンペ—案の光	1966	国際建築
藤井正一郎	設計競技の質的転換	1966	建築雑誌
村松貞由	日本文化に於ける設計競技の理念	1966	建築雑誌
藤井正一郎	諸外国における設計競技の現状と問題点	1966	建築雑誌
藤原孝生	建築家はコンペの中でなにを求められるか	1969	新建築
藤原孝生	コンペで選ばれたもの	1969	新建築
藤田哲一	設計競争の中で設計競技とは	1970	建築年鑑 1970年版
大田邦夫	コンペに肯定の立場より	1970	建築年鑑 1970年版
守屋秀夫	コンペに懐疑的な立場より	1970	建築年鑑 1970年版

6. プロポーザルコンペの始まり

プロポーザル・デザイン・コンペティションという名称が使われた最初期のものとして「藤沢市湘南台文化センター」(1984年)が挙げられる。これは新建築社編集長であった馬場璋造がプロデュースしたものである。公開ではあったが「建設業設計部が当選した場合に工事入札時には当事者の所属する企業は排除される」という規定が設けられたセミオープン形式で行われた。結果として最優秀案には長谷川逸子を選ばれ、若手建築家たちの間でコンペ熱が再燃した。本コンペで着目すべきは公開コンペという形式を取りながらも匿名性をなくしたという点であり、プロポーザルは人を選ぶための方式として採用された。実際に長谷川は自らの設計手法でもある「クライアントとの対話」を通して作品を完成へと導いた。

Table 2. 1990～2000年におけるプロポーザル事例

名称	結果発表	審査員	競技方式
JR御茶ノ水駅改築	1989		公開プロポーザル
那須野が原ハーモニーホール	1991 12.2	黒川紀章	国内 公開プロポーザル
東京都新美術館	1991		国内 プロポーザル
長岡芸術文化センター	1993		国内 プロポーザル
近江八幡市かわらミュージアム	1993		国内 プロポーザル
新潟市民芸術文化会館	1993 3.12	黒川紀章	国内 プロポーザル
大社町民文化会館	1993 11	菊竹清訓	国内 指名プロポーザル
たかのの里	1993 12	菊竹清訓・山本忠司 第二段階:吉谷誠章	国内 プロポーザル
秋田県大館地区多目的ドーム	1994	原広司	国内 プロポーザル
長久手町文化の家	1995 3.30	伊藤忠	国内 公開プロポーザル
倉橋町まちづくりセンター	1995 4	後藤亮雄	国内 指名プロポーザル
国立国際美術館	1995 9.26	国際	国際 公募プロポーザル
高齢者福祉・医療複合施設	1995	植木浩	国内 プロポーザル
武蔵野の森総合スポーツ施設	1995	植木浩	国内 プロポーザル
見本市展示場	1997 4		国内 指名プロポーザル
福島県女性総合センター	1997	伊藤邦明	国内 公募プロポーザル
砂丘博物館	1997	原広司	国内 公募プロポーザル
りんくうタウン 商業施設	不明		国際 プロポーザル
豊原新築心中学校及び小学校	不明		国内 プロポーザル
アライシパーク	不明		国内 指名プロポーザル
港区立箱根大平台区民保養施設	不明	石川洋美	建設業者内を除く一般建築事務所 公開プロポーザル
滋賀県立大学	不明		国内 指名プロポーザル
富山市芸術文化ホール	不明		国内 指名プロポーザル
滋賀県近江八幡市多賀町	不明	西川幸治	国内 公開プロポーザル

7. 国としてのプロポーザルへの対応

その後、増え続けたプロポーザルに対して、1994年公共建築設計懇談会は、設計プロポーザル方式の運用要領と設計者情報システムの在り方について報告書をまとめている。

① 審査委員会で審査方法を明示した上で、事務所の担当者の能力、業務遂行方針とその能力などを審査し、内容は公表する。

② 具体的な提出案は求めず、提出図書はスケッチ程度にとどめること。

③ 図面、模型などの提出は認めない。

公共発注機関と民間団体が議論して集約したこの要領は建設省から諸官庁、自治体に通達された。

8. まとめ

戦後のコンペ史は一等必選や規定違反、公開性といったコンペ制度確立のための論争が長らく行われ、公正なコンペ運営の在り方を成熟させてきた。しかし本来コンペの主役たる作品性への言及が比較的少ないことが見受けられた。これは制度が確立されていないが故に、作品まで辿り着けないとも捉えられるが、そもそもコンペにおける主役がいまだに不在なのではないだろうか。結果として現代まで競技という明確な秩序のもとに成り立つはずのものが、その重要とされる秩序が確立されていないために、全てを曖昧な形式にした歪んだ形のプロポーザルが繁栄期を迎えてしまったのではないだろうか。

今後はプロポーザルコンペの地方への繁栄の要因の一つとして埼玉県建築設計候補者委員会の活動について調査を進めると共に、コンペ史の展開と社会背景の相互関係についての調査を行っていく。

9. 参考文献

- [1]近江栄:「建築設計競技 コンペティションの系譜と展望」, 1986年
- [2] 大川三雄:「戦後日本の建築デザインコンペ」, JIA MAGAZINE, 第274号, pp.2-9, 2007年.
- [3] 山本想太郎・倉方俊輔:「みんなの建築コンペ論-新国立競技場問題を越えて」, NTT出版, 2020年.
- [4]佐澤始・真部保良・廣松隆志:「脱・設計入札を検証する」, NIKKEI ARCHITECTURE, 11月8日号, pp.138-149,1993年.
- [4] 内井昭蔵:「コンペ審査の論理」, NIKKEI ARCHITECTURE, 7月29日号, pp.99-115,1996年.